



一 真夜中の公園

街全体が静まりかえり、かすかな寝息を立て始めた頃、ふわふわとした白い綿のようなものが公園から住宅街へ次々と飛んでいく。白い綿は家の前に来ると玄関の鍵穴や窓のサッシなど、どんな小さな穴や隙間からでも忍び込んでいく。

そして、子どもが眠っている部屋を見つけると、子どもの鼻や口、耳の中から体の中へと沁み込むように侵入する。しばらくすると、白い綿はお祭りの綿菓子に変身したかのように体をパンパンに膨らませて、口や鼻の穴などから出ると、再び、公園へと戻っていく。そんな光景が街中の至る所で見られた。

健太はまだ起きていた。時計を見ると、もう十二時を過ぎていた。

「健太。もう、寝ろよ」

「健太。もう、寝なさい」

お父さんやお母さんが健太の部屋を覗き、何回も注意をするけれど、健太は、もうちょっと、もうちょっとで終わるからと答えるだけで、マンガを読むのをやめようとしなない。そのうちに、お父さんやお母さんの小言があんまりうるさいので、ごまかすために部屋の照明を消す。そして、ふとんの中に潜り込むと、懐中電灯を点けてマンガを読み続けた。

「なんだい。まだ、起きていたのか」

鬼ごっこで鬼に見つかった時のような残念そうな声がする。健太はまだ起きていたことがお父さんに見つかったと思い、懐中電灯を急いで消す。

「今さら懐中電灯を消しても、起きているのはわかっているよ」

お父さんのような低い声じゃない。お母さんのような甲高い声でもない。じゃあ、誰の声？健太はふとんから顔をゆっくりと出した。声の主を確かめるために暗闇の中で目をぱちくりとさせる。健太の瞳には、真っ暗な部屋の中で白い綿菓子のようなものが所在なさげに浮いているのが映った。

「君は誰だい？」

「僕かい。僕は、むにゃむにゃ、さ」どこが口はわからないけれど声だけは聞こえる。

「むにやむにや？」

「そう。むにやむにや。夢の運び屋さ」

「夢の運び屋？」健太は目の玉をぐるりと一周させる。でも、何のことかは健太の働くおじさん・おばさんの辞典には載っていない。

「そうだよ。君も寝る時に夢を見るだろう。その夢のうち、君たちの将来の夢だけを選んで運ぶんだ」

「夢のうちの、将来の夢？」

「そうだよ。野球やサッカーのプロ選手になりたいとか、世界一周をしたいとか、夢の中で見る君たちのいろんな希望や願望のことさ」

「ああ、それならわかるよ。でも、いつも夢を見たような気がするけれど、朝、起きると夢の中身はほとんど覚えていないけれどね。それで、僕たちの将来の夢を運んでどうするの？」

「夢を集めて夢の塔を作っているのさ」

「夢の塔？」健太は、再び、目の玉を一周させるものの、夢の塔がどういうものなのか頭の中には浮かび上がって来ない。

「そうだよ。夢の塔だよ」声の調子が強い。誇らしそうだ。

「僕もその夢の塔を見てみたいな」むにやむにやの自慢そうな声を聞いて、健太は掛けふとんが宙に浮くくらい跳ね飛ばした。

「うーん」健太の突然の願いにすぐに答えを出せずに、あるような、ないようなあごに手を当ててむにやむにやは考え込んでいる。

「なんとか頼むよ」おぼろげな姿のむにやむにやに向かって、健太は暗闇の中で手を合わせる。

「まっ、いいか。本当は起きている子どもを連れていくのは禁止されているけれど、君ならいいよ。その代わりに、取引をしたいんだ」

暗闇の中の白い綿があるような、ないような口で微笑んでいる。

「取引？」体を引いて、少し身構える健太。

「そう。君の夢をもらいたいんだ」

「なあんだ。そんなことか。宝物でも取られるのかと思ったよ」

健太の宝物は野球のグラブ。誕生日のお祝いにお父さんから買ってもらったものだ。こればかりは渡せない。でも、夢ならいい。夢の中では、覚えている限りでは、野球選手になったり、宇宙旅行をしたり、焼き肉を食べ放題したりしている。そんな夢ならお安い御用だ。それに夢なら無くなったりしないし、それに夢を渡したとしても、また、夢を見ればいいだけだ。この取引に損はない。

「じゃあ行くよ」

むにゃむにゃに促されて、健太はパジャマ姿のまま後をついていく。途中で、目の前のむにゃむにゃと同じ白い綿菓子のようなものがふわふわと浮かんでいるのを見かけた。

「どこへ行くんだい？」

健太は尋ねる。むにゃむにゃは「すぐにわかるよ」と答えるだけで、それ以上何も言わない。

「ここは、中央公園じゃないか」

健太は公園を見渡した。ここは、健太が友達とキャッチボールやドッチボールなどで遊ぶ所だ。また、近所の子どもたちにとっては、何をするにしても集合の場所だ。だけど、今は真夜中。友だちや他の子どもたちなどは誰一人もいない。

「ここに、君の言う夢の塔が本当にあるのかい？」健太は首を傾げながら、むにゃむにゃの横に並んだ。

「そうだよ。あっちを見てごらん」

健太は、むにゃむにゃのあるような、ないような指の先に顔を向けた。

「あっ。すごい」むにゃむにゃが指した方向には塔が建っていた。確か、昼間に遊んだ時には、こんな塔は立っていなかったはずだ。健太は大きく目を開けたり、細めたり、つぶっってもう一度

目を見開いたりするものの、やはり、塔は公園の真ん中に聳えていた。夢じゃないんだ。そして、下から見上げると、塔はこの街で一番高いシンボルタワーよりも高く見えた。

「そりゃ、そうさ。君たちの何千、何万もの夢を積み重ねたからね」

むにゃむにゃが自慢そうにあるような、ないような胸を張る。

「こんな大きな塔が公園に建っていたなんて知らなかったよ」

「夢の塔だからね。昼間は消えているから、見えないんだよ」

「へえ。これが僕たちの夢で建てた塔なんだ」

最初は塔の大きさに驚いていた健太だが、目を凝らしてよく見ると外側には野球のグラウンドやサッカーのスタンド、遊園地のジェットコースター、コーヒーカップなどが備わっているほか、滑り台やブランコ、鉄棒、砂場なども引っ付いていた。

塔の周りでは、他のむにゃむにゃたちができたてで、ほやほやの夢を口から吐き出していた。ロケットや潜水艦、バスやブルドーザー、こいのぼりやひな人形などが次から次へと口から湧き出てくる。

すると、塔の中段にいるひときわ大きなむにゃむにゃが、こいのぼりはここに吊れ、ひな人形は中に飾れと叫んでいる。他のむにゃむにゃたちは指示に黙って従い、こいのぼりを塔の外に張り付けたり、ひな人形を塔の中に運ぼうとしている。

「さあ、僕たちも塔の中に入ってみよう。でも、誰にも見つからないようにね」

そう言うと、むにゃむにゃは公園の植栽に隠れながら塔の裏側に回った。表では「そっちじゃない。あっちだ。そうだ。それでいいんだ」とあの大きなむにゃむにゃが体以上の大きな声を上げている。

「いまのうちだよ」

むにゃむにゃは非常口から塔の中に入って行く。健太もむにゃむにゃに続いて狭い通路を進んで行く。

「あっ。まぶしい」

健太は思わず目を手で隠した。そして、ゆっくりと指を開き、その隙間から覗いた。そこには小学校の体育館の何倍もの大きなホールが広がり、ピカピカのランドセルや机が所狭しと並んでいた。ベッドも新しい。洋服ダンスも新品だ。そうだ、もうすぐ入学式だ。

健太の小学校にも、もうすぐ一年生が入って来る。健太は自分の入学式のことを頭の中に突然浮かんだ。もう、五年前のことだ。入学式の前日は、新しいランドセルを背負ったまま、ベッドに潜り込んだ。興奮していたのか、ランドセルが重かったのか、なかなか眠れなかったことがつい昨日のこのように思い出されて笑った。

塔の中では、キリンやゾウなどの動物が自分の庭のように歩き回っている。伏せていたライオンが顔を上げ、ガアとあくびした。びっくりして背筋がちぢむ健太。トラが木の上から舌なめずりしながらこちらを見ている。目の前のむにゃむにゃの後ろに急いで隠れる健太。

「ここはサファリパークだね。パパやママと行ったことがあるよ。でも、その時は、車の中から見たんだ。こんなふう歩いていると、動物たちに踏みつぶされたり、食べられたりしないのかなあ」

健太はできるだけ動物たちから離れようとする。

「心配しなくても大丈夫だよ。夢の世界だから」

むにゃむにゃは恐くないみたいだ。シュワー。何かが吹いた。顔にかかる。唇に垂れてきた。舐める。塩辛い。見上げる。クジラのお腹が見えた。何百匹ものマグロの群れが健太の頭の上を通り過ぎていった。

「水族館もあるんだ。動物園と水族館が同時に見られるなんて、すごいや」

健太が言葉をなくし、ただただ感心していると「やあ、元気かね」と誰かが上の方から声を掛けてきた。首を背中に引っ着けるくらいに傾けて見上げると手すりからウルトラマンが手を振っていた。仮面ライダーも隣に並んでいる。ゴレンジャーなど、他の正義のヒーローたちも得意なポーズを決めていた。

「カッコいいなあ」健太はため息をつくばかりだ。

健太は塔の中があまりにも珍しいので、首が疲れるにも関わらず、上下左右に三百六十度動かしながら歩いた。そしていつの間にか塔のホールに真ん中に立っていた。明るい光が健太を照らす。見上げると吹きぬけになっていて、その周囲をらせん状に通路があり、クジラたちのいる

二階、ヒーローたちのいる三階へと続いている。最上階は何階なのだろうか。見上げただけではわからない。ただ、夜だというのに、塔の先端からは目がつぶれそうなくらいまぶしく太陽が光っている。あれも夢の太陽なのか。じゃあ、誰の夢だろう。太陽なんて、まぶしすぎて夢なんかみれないはずだけど……。

「さあ、もういいだろう。夢の塔を全て案内するには一年かかっても無理だから」

「そんなに広いんだ」

健太は感心するしかなかった。

「じゃあ、約束通り、君の夢をもらおうよ」

「僕の夢？」

「そうだよ。君の夢さ。さあ、夢を出してくれ」

健太は考え込んだ。さっきは、夢なんかすぐに浮かぶと思っていたけれど、いざ、夢を出せと言われてもすぐには思いつかない。

「ここにはない夢が欲しいんだよ」

むにゃむにゃの視線は塔の中をぐるりと回り、健太の顔に戻った。

「ここにはない夢？」

健太も塔の中の見渡す。健太が知っている夢もあるし、知らない夢もある。だけど、ここにはない夢は思いつかない。健太はますます困ってしまい、頭を抱えた。

「ここにはない夢なんて、何も浮かばないよ」

健太は音を上げて、立ち尽くす。

「もうすぐ夜明けだ。夜が明けると、僕たちは消えてしまうんだ。早く夢を浮かんでくれよ。約束だろ」

むにゃむにゃが健太の顔の目の前まで近づく。目の前が真っ白だ。でも、急かされれば急かされ

るほど、健太の頭の中は真っ白になっていく。ふわふわ浮いた綿菓子や頭の中に浮かんで飛んで行く。

「僕が夢じゃあ困るんだ」

むにゃむにゃは健太の頭の中がわかるのか、白い顔をしかめた。健太はますます困ってしまい、とうとう座り込んでしまい、「うーん、うーん」と唸りだした。

「もう時間がないよ、じゃあ、明日こそは夢をもらいに行くよ」

むにゃむにゃは風で吹き飛ばされたかのように突然いなくなった。夢の塔もテレビのスイッチを切った画面のように消えてしまった。一人取り残された健太は、そのことにも気付かずに「うーん、うーん」と公園の真ん中に座り込んだまま唸り続けた。